

真田幸村
目次

| | |
|--------------------|----|
| ◎大阪陣の遠因…………… | 1 |
| ◎真田の家系、幸村の生立…………… | 8 |
| ◎天下分目関ヶ原の合戦…………… | 15 |
| ◎大阪籠城の大評定…………… | 21 |
| ◎真田幸村大阪入城の準備…………… | 27 |
| ◎幸村入城途中の奇談…………… | 32 |
| ◎大阪方軍勢の手配り…………… | 39 |
| ◎真田大助初陣の功名…………… | 45 |
| ◎大助の奇略老臣の驚歎…………… | 52 |
| ◎再度真田大助の出陣…………… | 59 |
| ◎大助、藤堂勢を討破る…………… | 66 |
| ◎幸村独隠法を以て攻撃…………… | 72 |
| ◎荒川熊蔵、薄田隼人の奮戦…………… | 78 |
| ◎徳川家康奈良に逃る…………… | 84 |

| | |
|---------------|-----|
| ◎ 枚方暇の焼討及秀忠敗走 | 90 |
| ◎ 淀川くらわんか船の起原 | 94 |
| ◎ 幸村の奇略家康の智略 | 101 |
| ◎ 獅子身中の虫小幡勘兵衛 | 108 |
| ◎ 勅旨に因て両軍一旦和睦 | 114 |
| ◎ 大阪夏御陣の原因 | 121 |
| ◎ 青木民部正の不忠 | 128 |
| ◎ 大野治長の愚策 | 133 |
| ◎ 塙及阪田庄三郎の奮戦 | 142 |
| ◎ 塙団右衛門の戦死 | 148 |
| ◎ 関東勢百有余万の進軍 | 153 |
| ◎ 飯島太郎左衛門の報恩 | 157 |
| ◎ 幸村家康を追う | 163 |
| ◎ 桑名弥次兵衛の報恩 | 171 |

| | |
|-------------|-----|
| ◎後藤又兵衛の陣歿 | 175 |
| ◎薄田隼人の戦死 | 183 |
| ◎木村重成の戦死 | 190 |
| ◎平野地藏堂の焼討 | 196 |
| ◎徳川家康岸和田に逃る | 202 |
| ◎真田大助の奮戦 | 208 |
| ◎天王寺境内の焼討 | 215 |
| ◎真田幸村掉尾の奮戦 | 222 |
| ◎大阪落城及薩摩落 | 229 |
| 立川文庫について | 237 |
| 解説 加来耕三 | 239 |

真田幸村

◎大阪陣の遠因

想えば憐れ大阪の土さえ裂くる夏の陣、金さえ凍る冬の陣、吹き来る風の西東。乱れ行く世の浪花江や、芦の触りは茂くとも、故主のために身を尽し、尽さんととも筑紫濁、波上の岸の儘ならぬ、身は白露と消えしかと、たけきその名はいまの世に尚香ばしく残つて居るは、彼の真田左衛門尉海野幸村でございます。ところが此真田幸村及び最期の花々しき難波戦記などというは、当今に於いても大分に口演の上出版になつて居りますが、本編は当時の戦記又は文書などを充分取調べた上、いま迄出版になつて居る物とは全くその行き方を変え、難波戦記の主人公たる真田幸村を中心となし、周囲の事実を口演する間に、難波戦記の面白き処を抜萃して、口演致しますれば何卒其御心算りにて、御愛読有らんことを偏に願ひあげます。抑も応仁の一乱より天下は麻の如くに乱れ、二百有余年来所謂群雄割居、乱世の打ち続いて何時天下は泰平に治まるやら、四民其業に安んずることが出来ない、ところを当時漸く尾州三郡を領して居たる織田信長なる者が遂々時を得

て、どうやら斯うやら天下を治めたが、何しろまだ諸国には時を待つて居る者が沢山に在つて、却々其れ位いで完全に天下泰平を寿ぶく事が出来ない。スルと間も無く時は天正十年六月二日、桔梗の旗差物を翻がえしたる明智日向守光秀が謀反、本能寺の不意討ち合戦にて、首尾宜く天下を吾手に握ろうとしたが、同月十三日豊臣秀吉との合戦にて遂に天下は空しく秀吉の手に歸したが、そこで秀吉は光秀を滅ぼしたるのちに主君信長の弔いとて、京都大徳寺において、大焼香を催し、そののち賤ヶ嶽の合戦に勝利を得て彼の柴田勝家を滅ぼし、続いて小牧山の合戦等、数度の戦争を経て全く天下は豊臣氏の有に歸したから、上は一天万乗の帝に誠忠を尽し、神社仏閣を再建致し、日本国中にも充分其れ々々要書を立て、尚其上文祿年間に、至つては、朝鮮国迄も手入れを致し、是れで殆ど天下泰平に納まつたと思いきや、斯る稀世の英雄も慶長三年八月十八日天命に仍つて御他界になると、不幸にも其翌年前田利家と言う豊臣家の柱石たる人が卒し、跡に残つた徳川氏一人の治世と成りましたが、其内にも万一人に天下を奪われては一大事と、表面には豊臣家に忠義を尽すと思せかけ、内実自分の欲望を達せんとしたのは彼の石田三成でございませう。遂に其翌慶長五年に至つて、関ヶ原の乱を引起したのが豊臣家の末路を早める大原

因、何でも事有れかしと待つて居た徳川家康は、時こそ来れと雀躍して打ち喜び、下野国小山より軍勢を引返して関ヶ原の戦争と成つたが、金吾中納言の裏切りに仍つて悉く石田方は滅び、徳川の治世に相成りました。斯る次第でございますから、豊臣家の亡びたのは世の成り行きとは言い乍ら、第一の原因としては、前田利家の死、石田三成の小刀細工、大阪方では淀君の吾儘、大野治長などの姦策、是れ等が最大原因と成つたのに相違ございませぬ。御話しは外道へそれる様でございませぬが、当時の事情を臆ろげ乍ら知る事が出来る御話しが有ります故一寸此処で御披露致して置きます。其れは前田利家、徳川家康、所謂太閤御他界後、豊臣家の後見役たる二人に關した事で、此前田利家と言う人は幼名を犬千代と言ひ、元服して孫四郎と称えて居たが、更に其後主君織田信長公の命に依つて又左衛門と改名をしたが、父祖代々織田家に仕えて、年十四歳の時に初陣として敵將の首級を取り主君の御感状を頂き、後信長公越前を平定したる時に利家に駿河の府中三万三千石を賜ひ、更に能登一国を御加増になつたが、主君信長公本能寺において弑せられた後、秀吉を翼けて加、能、越三ヶ国の太守となり、官位は大納言を賜わり、慶長四年閏三月中旬、病氣をもつて大阪において薨去された、年は六十三歳で子は六男、利長、

利政、利好、利常、利高、利貞等でございます。この利家が病をもつて將にこの世を去られんとせし時、自分の倅六人を枕辺に呼び寄せて、子供等の顔を一々見廻しながら、利家「ア、鳥の將に死せんとするやその声悲しく、人の將に死せんとするやそのいう処善しとか。其方等は能く吾が臨終のいう言葉を覚えて置けよ。吾れ荒尾の一城主より身を起して北陸の太守と経登り、大納言の位いを賜わりしにいたりたるは、これ誰れの方ぞ、唯故太閤殿下の恩誼によるのである。されば吾が子々孫々に至る迄、決して豊臣氏に背くことは出来ない」と心に誓つて居るのである。それ故太閤殿下にも吾がころぎしを御知りになつて、御子秀頼公を頼むといわれたが、せめて若君十五歳にもなられたうえ、天晴れ天下の武將にあおがれ給うを見て死にたいと思つた吾れも、最早や天命尽きて今日におよぶは、また是非もなき次第である。然るに熟々世の有様を見るに、江戸内府徳川家康は徳高才智勝れて、殊に家来には有名なる猛将勇卒を従え居れば、太閤恩顧の諸將も多く心を寄せ、万一天下の乱れとなれるその時は、豊臣氏に代つて四海を掌握する兆候あり。併しながら今漫りにことを起して徳川家の怒りを招くときには、その響きは忽ち大阪におよび、若君の御身も心許なし。先刻吾れは石田三成、増田長盛の巧言に欺かれて、家康の心

を疑いたるも、家康とて漫りに自己の野心を遂げんがため天下の乱れを好むことはあるまい。またよし野心があればとて、風なきに波は立たぬ道理、汝等も能く克くこのことを思案して、徳川家の怒りに触れない様にせねばならぬ。又故太閤殿下の恩誼を忘れて大阪へ弓曳くことは、決して相ならぬぞ。併しながら吾れ死去せしと聞かれたならば、若君は如何に歎かるゝであろうか。加賀の老爺よ江戸の老爺よと、吾れと家康とを同じ様にはいうて居られるが、その家康より吾が方を一層慕わせ給う御心深かりしが、一朝幽明を隔て、其安否を御訪ねもうすことさえ出来ぬというは、誠に情けなき次第である。それを思えば此利家も、まだ死す可き次節ではない。ア、せめてモウ五六年の命が欲しいものだ」と此稀世の英雄も、主家のことが心に掛れば、自分が病苦も打ち忘れて、熱き涙をホロ／＼と零し、目を睜つた儘打ち歎かれる。枕辺に付いて居た五六人の人々も、皆暗涙に咽んだが、此時嫡子侍従利政は、ジリ、膝を進めて父利家の枕辺に近寄り、利政「ハッ、利政でございます。何卒父上にはその義御安神遊ばします様、この利政斯くこの世にある上は、豊臣の天下は大盤石、万一此大阪に対して野心を抱く者あらば、利政が第一番に走せ向い、屹度其罪を糺して故殿下の御厚恩の万分一に報い奉るでございましょう」と決然と

していい放つ。折柄間の襖を静かに押し開いてはいつて来た近習の武士、遙か末席に手を
仕えて、近「ハッ、申し上げます」利政「ウム、何事ジャ」近「只今御主君御病気の御見
舞として、江戸内府徳川公御入来になられましたてございませう。いかゞ取り計いませう
や」というに皆々顔を見合せて居りましたが、この時利長は、利長「ウムそうか、よし
く、いま拙者共御出迎いを致すであろう」と利長は利政を引連れて、家康出迎いのため
に座を立つて行く。やがて家康は例の莞爾やかな顔をいたしながら只一人、前田利長、同
じく利政の兄弟を従えて此場に出で来り、まず一通りの挨拶を済ますと、利家は家康の顔
を見るより病苦を忍んで褥の上に取り直り、うしろから抱えた利貞の身体に倚つ掛りなが
ら、これ又慇懃に挨拶をする。家康は隔てもなくいろく〜と利家を慰めて後、家「それで
は加賀殿、拙者はこれにてお暇をもうすてござる。折角御大切になさるゝ様、偏えに願
たてまつる。拙者もいま加賀殿に先立たれてははなし對手もなく、又相談を致す人もな
い。何卒今一度御全快なさるゝ様主家のため前田家のため、只管お頼みを申す次第にてい
ずれも方御免」といまでも立ち掛らんとするこの時、何思つたか前田利家、青ざめた顔
にサツと紅の色を染め、目を見る間に吊り上つてジツと家康の顔を白睨み付け、ジリ、膝

解説

加来耕三

(歴史家・作家)

『真田十勇士』は再現可能か

本書の主人公である真田幸村と、彼に率いられる『真田十勇士』と呼ばれた人々の活躍は、『立川文庫』の『ドル箱』となった。では、この『真田十勇士』——彼らは実在したのか、と問われれば、論理的な結論はすでに出ている。答えは、否であった。

なぜならば、「猿飛佐助」「霧隠才蔵」の二人がようやくメンバーに加わり、「十勇士」の十人が勢揃いするのは、大正時代（一九二二～二六）の立川文明堂——まさに、本シリーズ『立川文庫』においてであった。

だが、この十勇士の設定は無責任なもので、略歴一つまともに定まっていない。極端に言えば、「猿飛佐助」と「霧隠才蔵」の名前を入れかえても、そのまま通用するようなストーリーが、シリーズを通して、数多くつくられていた。

これは「真田十勇士」だけではない。そもそも彼らの主君であり、本書の主人公でもある真田幸村——この「幸村」という諱（正式の名前）さえ、歴史学的には実在していなかったのである。彼は正しくは、「信繁」であった。

歴とした武士の諱は、戦国時代も江戸時代になっても、主君の諱から一字（偏諱）をもらうのが慣例となっており、信繁の兄は、主君・武田信玄の諱「晴信」の下の字「信」をもらって、「信幸」（のち信之）と名乗っている。弟は「信繁」であった。幸村の場合、そもそも上の字の「幸」がおかしい、ということになる。

この「幸村」は、江戸時代に書かれた実録小説（この事件の裏には、実は——、と創作話をもつてくるパターンの通俗小説）の、『真田三代記』で世に広まった名前であり、大正三年（一九一四）に立川文庫が『真田三勇士忍術名人 猿飛佐助』を刊行したことによって、ひろく喧伝され、世の中に定着してしまった。

「真田十勇士」のメンバーについては、別の機会に触れるとして、ここでは歴史上の人物・真田幸村（正しくは信繁）を詳しくみてみたい。

彼の真田家が忽然と、歴史の舞台に登場するのは、初代の幸隆からであり、その三男・

真田幸村 [立川文庫セレクション]

2019年8月30日 初版第1刷印刷

2019年9月10日 初版第1刷発行

著 者 加藤玉秀

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1858-0 2019 Kato Gyokushu, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。